

第13分科会

研究主題

運動の特性や魅力に応じた体育的学力をはぐくむ体育教育
－運動の系統性を踏まえた授業展開の工夫－

福岡県立福岡工業高等学校

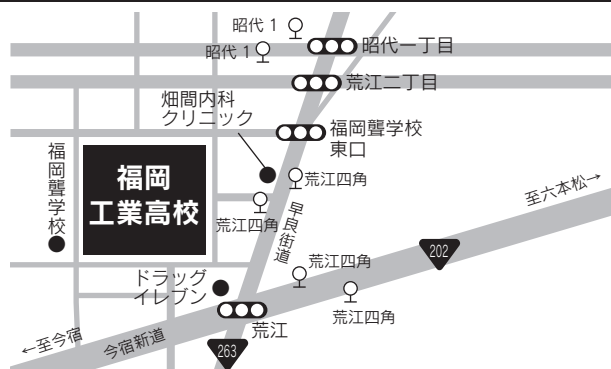
日程

9:00	10:05	11:05	11:55	12:20	13:20	13:30	14:00	14:40	15:10	15:20
受付	公開授業①	公開授業②	授業質疑	昼食	開会行事	研究発表	研究協議	指導助言	閉会行事	

公開授業案内

公開授業①	第1学年	「柔道」	武道場
公開授業②	第1学年	「バスケットボール」	体育館

学校所在地図



交通機関

- 最寄駅
「西新(福岡市営地下鉄)」下車 徒歩20分
(バス約10分)
- 経路
博多 発 8:31 8:34
↓福岡市営地下鉄空港線
西新 着 8:44 8:47

学 校 概 要

学 校 名	福岡県立福岡工業高等学校		
校 長 名	野見山 秀 樹		
学 級 数	27学級	生 徒 数	1,064名
所 在 地	〒814-8520 福岡市早良区荒江2-19-1		
連 絡 先	TEL 092-821-5831 FAX 092-822-5837		

【学校紹介】



本校は工業立国の一端を担って、明治29年西日本で最初の工業高校として、福岡市の中心部である東中州の仮校舎で産声を上げてから、発展の歳月を歩んできました。「質実剛健」「自律」「創造」の校訓のもと、社会に送り出した卒業生は2万8千名に及び、産業界をはじめ各界の発展に大きく貢献しています。

現在は、8学科1コースを有する県下最大規模の工業高校として、社会に貢献できる「スペシャリスト」の育成を目指し、人づくり、学力向上、ものづくりを柱として専門教育はじめとする教育活動を進めています。

その中でも「人づくり」の観点から本校は学校行事、部活動等の特別活動に特に力を入れています。二日間の体育祭をはじめとする多くの特色ある学校行事に取り組むことで「地域に開かれた学校づくり」を目指すとともに、部活動においては、生徒会のテーマである「燃えろ福工生、目指せ日本一」を掲げ、現在8割を超える生徒が部活動に参加し、各部とも素晴らしい成果を上げており、本校の活性化に大きく貢献しています。また、学校行事や部活動に対する生徒の姿勢も代々の生徒に受け継がれた福工精神というべきものが「チーム福工」という考え方にまとめられ、自信と誇りに満ちた学校生活を送るための大きな指針となっています。

「チーム福工」の目指すものは「ものづくりエキスパート日本一」、「部活動・生徒会活動日本一」、そして卒業生の6割が就職する進路状況を踏まえ、社会でのコミュニケーションは挨拶に始まるとの思いから「挨拶日本一」です。

学校生活のあらゆる場面において「日本一を目指す精神」の実践に向けて、日々努力を重ね、地域から愛され、信頼される学校となるよう職員・生徒一丸となって取り組んでいます。

研究主題

運動の特性や魅力に応じた体育的学力をはぐくむ体育授業

―運動の系統性を踏まえた授業展開の工夫―

福岡県立福岡工業高等学校

1 主題設定の理由

(1) 大会主題とのかかわりから

大会主題である「運動の楽しさを味わわせ、体育的学力の確かな定着を図る体育授業の創造」を受けて、生徒がさらに生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する基礎を培うことを目標として本校では、研究主題を「運動の特性や魅力に応じた体育的学力をはぐくむ体育授業」と設定した。目標達成に向けた具体的取り組みでは、生徒の発達の段階を考慮しながら、系統性を踏まえた指導内容の明確化と体系化を目指し、「できる」「わかる」「かかわる」喜びと、身に付けた体育的学力を「活用する」喜びを十分に味わわせる体育授業を提案したい。

本校では、教育目標のひとつに「生徒の自主的自発的な活動を促進し、あらゆる教育の場を通して基本的生活習慣の確立と礼儀正しく責任を重んずる、自律精神と態度の醸成に努め、生徒の自己教育力を育成する」ことを掲げている。保健体育科の教育方針は、「授業規律を大切にし、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育成するとともに、健康の保持増進及び体力の向上を図ること」である。指導目標として1年次は基礎基本を重視した授業、2年次は生徒の自主的活動を促す授業、3年次は生徒の主体性を伸長させる授業の取り組みによって学ぶ意欲を促し、生徒達自らの体力や健康に関心を持たせ、積極的に授業に参加する態度等の育成に力を注いできた。

(2) 本校におけるこれまでの体育授業の経過から

これまでの保健体育の授業においては、各領域を通じて能率的で安全な行動ができるように、集団号令走・福岡県民体操・ストレッチ運動・補強運動等といった集団としての学び方を習得しており、生徒自らが自主的に授業に取り組む姿勢が見られる。

また、本校は研究主題である「運動の特性や魅力に応じた体育的学力をはぐくむ体育授業」を追求するため、①各運動領域ごとに体系化・明確化された指導内容の設定、②運動についての理解や運動の合理的、計画的な実践、③中学校の内容・経験を踏まえた系統性のある指導のあり方、の3つの視座をもって体育授業の実践を試みてきた。この3つは、技能、態度、知識、思考・判断の4つの観点からなる体育的学力を支える重要な要素として理論的な基盤となるものであり、運動の系統性を踏まえることの必要性を示唆するものと考ええる。以上の理由において、研究副主題を「運動の系統性を踏まえた授業展開の工夫」とした。

2 主題の意味

(1) 「運動の特性や魅力に応じる」とは

運動が有する特性や魅力については、保健体育科で取り上げる各領域毎に、さまざまなものがあり、また、特徴があると考えられる。したがって、各領域を取り上げる際に、その領域の学習を通して、どんな特性や魅力に触れさせることができるのかを教師として明確にしておくことが重要と考える。また、その特性や魅力に触れさせながら、運動を楽しんでいくために必要な資質や能力を主体的に獲得していく内的なエネルギー（原動力）となる「できる」「わかる」「かかわる」「活用する」喜びをどのようにして生徒の内面に旺盛にしていくかということが重要と考える。

生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現するために必要な資質や能力の向上を図るには、これまで以上に楽しみながら技能を身に付け、体力を高めていく体育授業が求められる。そのためには、教師が各領域における運動の特性や魅力をどのようにとらえ「何を教え、何を身に付けさせるのか」を明確にしていく必要がある。

運動の特性とは、その運動を学習することによって生徒にとってどのような意義を持つかをとらえた見方である。運動の魅力とは、生徒が技能を高めたり、作戦を立てたり、集団をまとめたりするなどの過程を通して、仲間とのコミュニケーション能力を育成するなど、問題の解決を目指して取り組むことにより「スポーツをする楽しさや喜びを深く味わうことができるようにする」ことである。

(2) 「体育的学力」とは

学習指導要領解説保健体育編・体育編に示す「技能」や「態度」、「知識、思考・判断」のことである。

①技能

身に付けた技能や動きを高め、新たな得意技等を身に付けることにより、攻防や動きの様相を高めて、記録や技に挑戦したり、ルール等を一層正規に近づけていくこと。

②態度

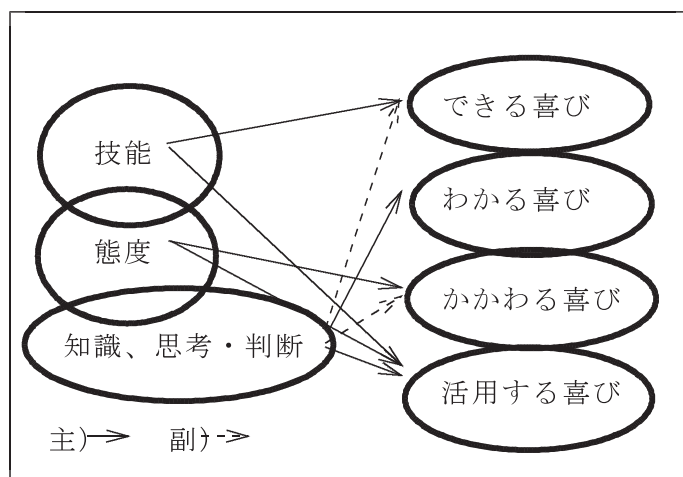
公正、協力、責任、参画などに対する意欲を高め、自主的・主体的に学習に取り組む姿勢であり、思考力・判断力の育成に大きく関与する。

③知識、思考・判断

「技術の名称や使い方」、「体力の高め方」、「課題解決の方法」、「練習や発表の仕方」を身に付けることで、意欲、思考力、技能の源となる。

これまで学習した知識や技能を活用して、自己や仲間の課題に応じた解決力をはぐくむこと。

図1 《体育的学力と4つの喜びの関係図》



(3) 「運動の特性や魅力に応じた体育的学力をはぐくむ体育授業」とは

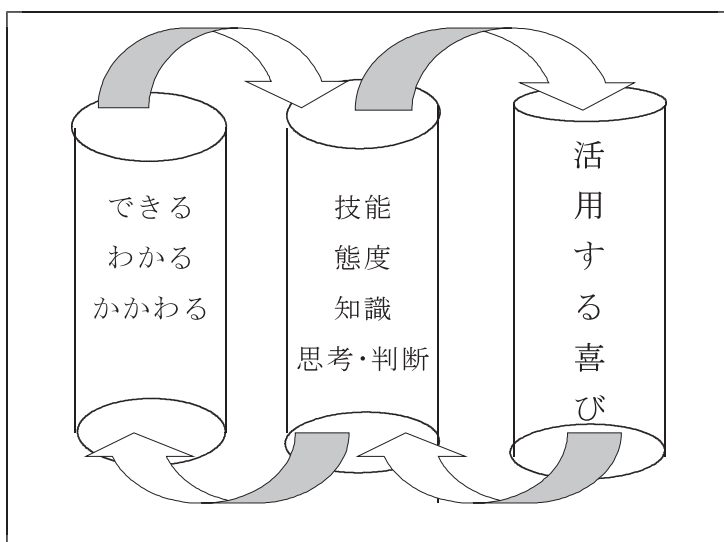
生徒自らが運動やスポーツを生活の一部として生涯にわたって継続していくことができるように、目指す生徒の育成に向け、取り上げる運動領域の特性や魅力を明らかにし、その中で、「できる」「わかる」「かかわる」「活用する」喜びを繰り返し味わわせながら、意図的・計画的・組織的に構成された体育授業のことである。

体育的学力の確かな定着を図ることとは、「できる」「わかる」「かかわる」喜びを繰り返し体験することにより、活動する意欲をさら旺盛にして「技能を高める」「作戦を立てゲームをする」「チームをまとめる」などの自分自身を「活用する」喜びへと駆り立て、運動に親しんでいく体育的学力（技能、態度、知識、思考・判断）が定着していくことと考える。

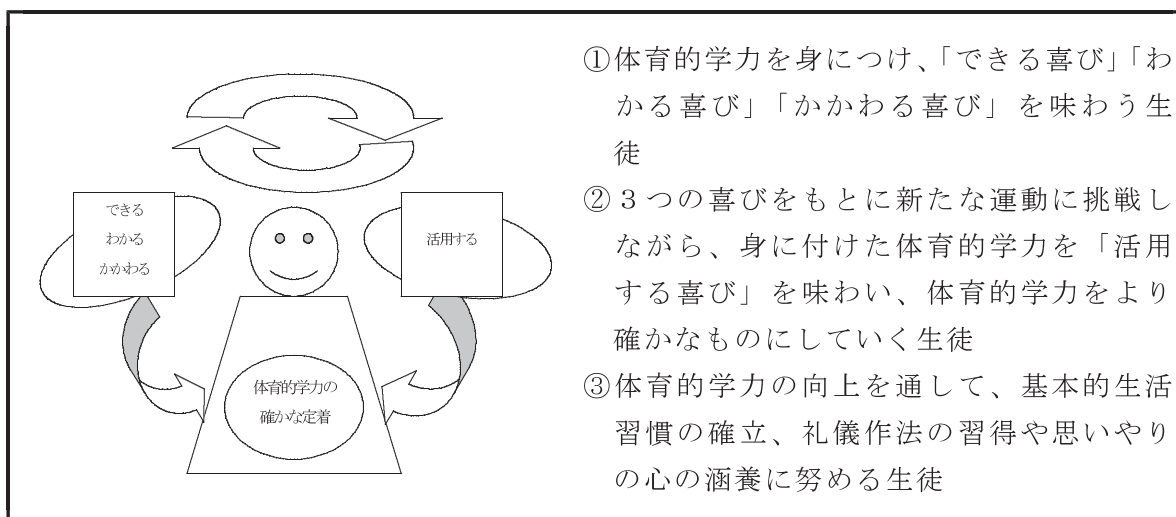
ここでは、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、生徒の発達段階に応じて基礎・基本的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力

をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに留意したい。そのことが真に運動やスポーツに親しんでいく「生きる力」が培われていくものと考えている。

図2 《体育的学力の確かな定着を図るイメージ図》

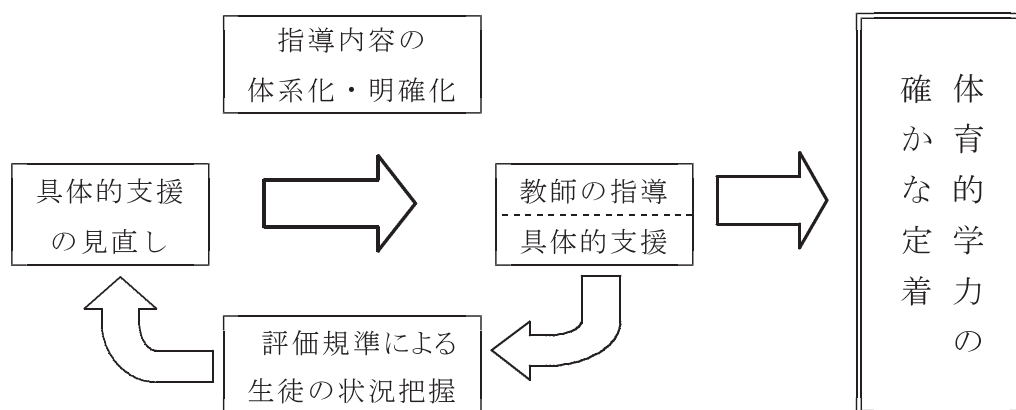


(4) 目指す生徒像



(5) 「運動の系統性を踏まえた」授業展開の工夫とは

体育的学力の確かな定着を図ることができるよう、各運動領域ごとに体系化・明確化された指導内容から設定した単元目標及び評価規準に照らし、教師の指導の結果による生徒の到達状況を見極め、フィードバックしながらその課題を明らかにし、より効果的な指導をしている。



3 研究の目標

運動の系統性を踏まえた授業展開の工夫を行い、運動の合理的・計画的な実践を通して知識を深めるとともに技能を高め、運動の楽しさや喜びを深く味わうことができるようにし、体育的学力の確かな定着を図る体育授業を構築していくための指導法を究明していく。

4 研究の仮説

生徒の発達の段階を踏まえた指導法を以下の着眼点Ⅰ、Ⅱ、Ⅲから具現化すれば、生徒たちは「できる喜び」「わかる喜び」「かかわる喜び」を味わい、さらにそれらを「活用する喜び」に発展させながら「体育的学力」を着実に身に付けていくであろう。

着眼点Ⅰ 保健体育科において、指導する内容を体育的学力の4観点（技能、態度、知識、思考・判断）別に生徒の発達の段階を踏まえて分析し、ねらいを明らかにする。そのねらいをもとに生徒の主体的なかかわりが期待できる環境を構成したり、運動教材を選択・開発したりする。

着眼点Ⅱ 「できる喜び」「わかる喜び」「かかわる喜び」「活用する喜び」を味わいながら体育的学力を身に付けることができるような単元を構成し、その構成に応じた具体的な支援を工夫する。

着眼点Ⅲ 評価計画を位置づけた単元の構成と評価規準を設定し、その評価を踏まえた具体的な支援の工夫をする。

5 研究の構想

(1) 運動教材の選択・開発（着眼点Ⅰ）

生徒が、それぞれの発達の段階で確かに身に付けるべき体育的学力を明らかにしたうえで主体的なかかわりを通して獲得することが期待できるように運動教材を選択・開発する。

①柔道の授業において、「初心者に対する柔道学習の工夫」を中心にした男女共修の学習を展開する。また、狭い道場のため「グリッド」を用いて授業を進め、見取り稽古の視点を養い、安全面や他人に配慮する生徒を育てる。

②ゴール型の球技であるバスケットボールの指導において、ボール操作やボールを持たない時の動きを高める様々な教材・教具を取り入れての授業展開を試みる。

(2) 運動する喜びを味わわせる単元構成と具体的な支援の工夫（着眼点Ⅱ）

生徒自らに運動する喜びを味わわせるには、生徒の主体的な追究活動が展開されるよう心がける必要がある。しかも、その喜びは、まず「できる喜び」「わかる喜び」「かかわる喜び」を十分保障した上で、「活用する喜び」へと広げていく必要がある。

(3) 評価計画を位置づけた単元の構成とその評価を踏まえた具体的な支援の工夫（着眼点Ⅲ）

体育的学力である「技能」や「態度」、「知識、思考・判断」を身に付けていくためには、学習活動における生徒の反応や目標への到達状況から、その単元構成や生徒の状況における教師の具体的な支援のあり方が適切であるかを判断する必要がある。その指針として単元目標に準拠した「評価規準」に基づいて生徒の状況を把握し、具体的な支援の工夫を繰り返す試みをする。

6 実践事例

〔実践事例Ⅰ 単元 武道（柔道）1年生〕

(1) 指導目標

「相手の動きの変化に応じた基本動作から、基本となる技、得意技や連絡技を用いて相手を崩して投げたり、抑えたり、返したりするなどの攻防を展開すること」を目標とする。

(2) 単元計画 配当時間27時間中、本時15時間

配時	1	2-7	8, 9	10-12	13-15	16-18	19-22	23-26	27
導入	県民体操、補強運動、挨拶、出欠点呼、健康観察、学習内容の確認								
展 開	オリエンテーション	受け身	前回り受け身						
			打ち込み						
			膝車 支え釣り込み足 小内刈り 大内刈り	大外刈り 大腰	払い腰 背負い投げ 一本背負い (グループ練習、グリッドを使った練習)	グリッドを使った練習	投げ		
						立ち技の約束稽古			
						投げ	固め技 寝技の乱取り	グリッドを使った練習 乱取り	試合 2分
						立ち技			
						約束稽古	簡易試合 30秒×3-5	簡易試合 1分×5-8	
			投げ						
整理	整理運動、本時の反省・次回の確認、挨拶								

(3) 指導の実際

①課題の把握 (柔道アンケートの実施) 361名(男307名 女54名)

ア 中学校の授業における経験の有無は、男子は50数名、女子は、3名の生徒が授業で経験していた。中学校側の施設や設備、指導者不足の学校事情からか授業で全く経験していない生徒も多く見られた。また、柔道の授業を経験した生徒であっても、前回り受け身に自信が持てなかったり、立ち技は全くやらず、寝技のみ実施した中学校もあった。得意技や連続技は、柔道部に所属した生徒のみの解答になっていた。

イ 本校の柔道授業の進め方は、初心者・未経験者を対象とし、柔道着の着方や礼法から教える必要がある。また、中学校時の授業での経験者や初段を持った者もあり、多様な生徒が入り混じっての授業が予想される。また、クラスによって運動が苦手な女子や、おとなしい男子生徒も多くいるので、その生徒が、奮起出来るような内容を工夫し、進めたいと思っている。

②授業づくりの意図と工夫

ア 柔道の最終目標は、「心・技・体」の育成にある。他者への礼節や尊敬の念が希薄な現代の生徒に対し、我が国固有の文化に触れさせ、日本人が重んじてきた礼儀や伝統的な考え方や行動の仕方を継承させたい。

イ 本校体育科の教育方針に準じて授業規律を大切にするとともに、活気のある授業と生徒を作りたい。また、「体育的学力をはぐくむ体育授業」を目標に運動に親しむ資質、態度や能力を育てる一つの手だてとして「見取り稽古」を身に付けさせ、他者にアドバイスが出来る資質を養いたい。「できる」「わかる」「かかわる」喜びと、「活用する」喜びを経験することで、柔道の持つ楽しさや達成感を味わわせることの出来る授業を目指したい。

ウ 柔道場が狭く、安全面への配慮が危惧される。そこで、効率よく練習するためには工夫した学習内容と展開が必要になってくる。ラグビーの練習で用いられる「グリッド」を使い柔道場を有効に活用したい。また、女子がいるクラスもあるので簡単な運動から取り組み、興味・関心を持たせることも考えたい。

エ 中学校との柔道授業の連携については、経験者が50数名。受身に自信が持て、技まで出来る者が、12名程度とあまりに少なく、クラスによって経験者がゼロといった偏りも見られた。今年度は、未経験者中心の授業にすることが望ましいと思われる。経験者には、アドバイスをさせ、達成感や充実感を持たせることも大切である。

今後は、学習指導要領改訂により柔道を経験した生徒が入学してくる。中学3年時とスパイラルさせ、授業を構築していく必要がある。

オ 柔道ノート

「ねらい」・授業を自己評価させ、達成度を探る。

・グループの者や相手（パートナー）に対してアドバイスをすることを促す。

「できる」「わかる」「かかわる」喜びを繰り返し体験し、体育的学力を身に付ける礎を構築する。

「取り組みの実際」授業終了時に配り、放課後、体育委員が回収して提出させる。

「成果」当初、自己評価の達成度は、低かったが、授業を重ねるごとに高くなってきている。

また、アドバイス面においても多くのことを見出せるようになってきた。

カ グループ学習

「ねらい」お互いに言い合いながらコミュニケーションの向上を図ることができる。

「取り組みの実際」受身のグループ番号順に班分け（5人）技（2人）

グリッド（6～7人）

授業内容に合わせ、グループ学習を使い分け実施した。

「成果」・授業を重ねるごとに、活発なアドバイスや、深い内容の意見交換がされるようになった。

・同じ体格での学習により、不安感を取り除き、取り組むことが出来た。

キ グリッドを使った学習

「ねらい」柔道の授業において、一試合場という狭い空間の中で、40人体制での授業は厳しいものがある。そこで、8畳のミニ試合場を設定し、その中で練習を行った。生徒が、グリッド方式の練習を通して自己や他者の課題を見つけ、その解決に向け練習に取り組むことが出来るようにする。

*見取り稽古が出来る資質を育てる。

「取り組みの実際」グリッド「8畳」を使ったグループ学習（6～7人）。

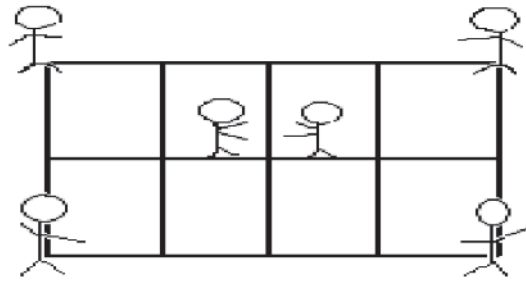
グリッドのコーナー四隅に生徒を立たせ、次のことについて注意させた。

・安全面について管理させる。

・投げた技について審判の評価をさせる。「一本、技有り、有効」

・コーナーに立つ者にアドバイスの意見を言わせる。

『グリッドを活用した授業風景』



「成果」他人の技を間近で観察し、自分もチャレンジしようとする姿勢が見られ、競う楽しさや喜びを深く味わい、主体的に取り組み、安全面にも配慮する心構えができた。また、審判法にも興味を持ち積極的に取り組んでいた。

〔実践事例Ⅱ 単元 球技（バスケットボール）1年生〕

(1) 指導目標・・・「安定したボール操作と空間を作りだすなどの連携した動きによってゴール前への侵入などから攻防を展開する」

(2) 単元計画

過程	はじめ		なか							まとめ				
配時	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
導入	用具の準備、準備運動（心と体の準備）、整列、挨拶、出欠点呼、体調確認、本時の学習内容の確認													
展 開	オリエンテーション	グ リ ド 試 し の ゲ ー ム ②	基礎的技能を高める基本ゲームの体験	基礎的技能を高めるドリルゲーム（5種類）			チームや個人の課題に応じた基本ゲーム（選択・改良）			ゲームに向けた作戦・戦術の確認 W-upを兼ねた基本or課題G				
				速攻につなぐ課題ゲーム（オール） 条件3-3 条件+a	早いパス回しにつなぐ課題ゲーム（ハーフ） 3-2、4-3	課題ゲーム（ハーフ） 3-2、4-3、5-4ゾーン	チームの課題に応じた課題ゲームの選択・改良 （ハーフコート版、各班エリア区分）			リーグ戦Ⅰ 1vs2 3vs4	リーグ戦Ⅲ 1vs4 2vs3	リーグ戦Ⅴ 1vs3 2vs4		
		試しのゲーム①		課題の整理と追求への見通し	速攻につなぐ課題ゲーム（オール） 連続3-3 条件3-3	速攻につなぐ課題ゲーム（オール） 条件5-5	早いパス回しにつなぐ課題ゲーム（オール） 5-5	課題ゲーム（オール） 条件5-5 ゾーンDF	チームの課題に応じた課題ゲームの選択・改良 （オールコート版、各班時間区分）			作戦会議課題G	作戦会議課題G	リーグ戦Ⅵ 1vs4 2vs3
					試しのゲーム			リーグ戦Ⅱ 1vs3 2vs4	リーグ戦Ⅳ 1vs2 3vs4	単元のまとめ				
							対戦 1vs2 3vs4	対戦 2vs4	対戦 1vs4 2vs3					
	整理			後片付け、整理運動、本時の反省、申し送り事項、次時の確認・留意点、挨拶										

(3) 指導の実際

①課題の把握

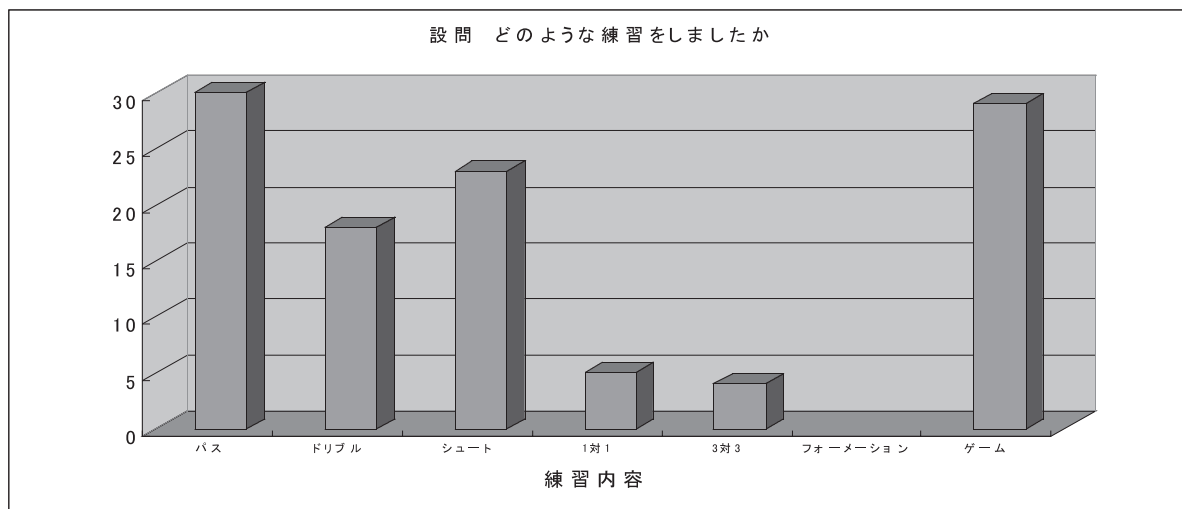
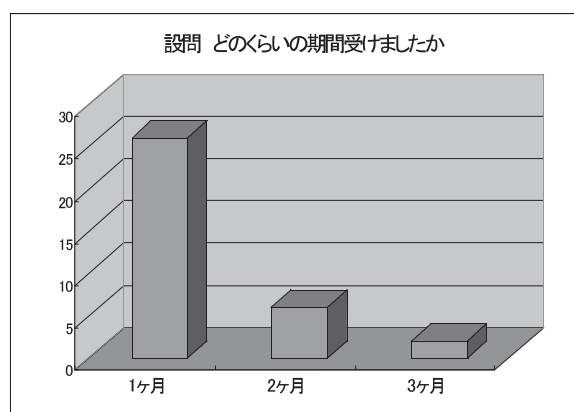
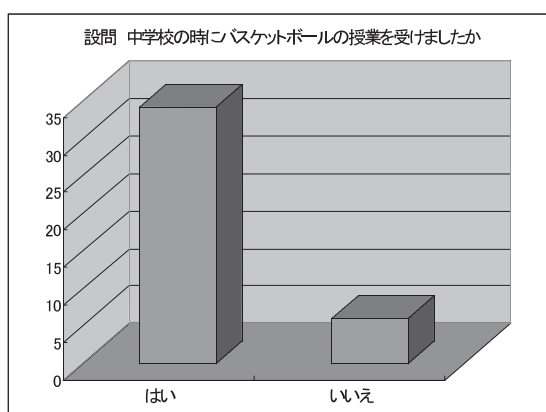
(バスケットボール アンケートの実施 男子80名)

「ねらい」 中学3年生までの生徒達のバスケットボールの経験や能力を把握し、高校入学時としての授業の計画・工夫に役立てる。

「取り組みの実際」

ア 方法

バスケットボールの授業の1時間目に実施「中学校時の授業の有無」、「好き、嫌い」「知っているルールや技術」「持っているイメージ」などを記入させる。



イ アンケートの結果より

アンケート結果から、生徒達の多くは中学校時にバスケットボールの授業を受けておりその実施期間は1ヶ月という回答が最も多い結果となった。授業での練習内容はパス、ドリブル、シュートといった個人における基本動作の習得を経てゲームに移行する傾向がみられた。したがって、高等学校入学年次におけるバスケットボールの授業としては、中学3年時までの学習を踏まえ、「安定したボール操作と空間を作りだすなどの連携した動きによってゴール前への侵入などから攻防を展開すること」をねらいとした。

また少数ではあるもののバスケットボールの苦手な生徒や、ルールが難しいため、嫌いであるといった生徒もみられた。そういった生徒達にも配慮し、少しでもバスケットボールが好きになるような基本ゲームや課題ゲームの工夫に取り組んだ。

②授業づくりの工夫

ア 課題発見ゲーム（5対5の試合形式）の実施

「ねらい」ゲームを行うことで、生徒一人一人の現在の技能レベルを知ることができ、基本技能が、いかに必要か意識させ、その後の授業の取り組みにつなげる。
「取り組みの実際」単元の初期段階で様々なルールを工夫を行い、課題ゲームを実施する。
「成果」基本的な技能の習得がなければ、ゲームを楽しめないことに気づけた。

イ 技能確認の実施

「ねらい」中学校での経験、能力の差を確認する手立てとする。記録が伸びることで達成感を味わわせて、さらに積極的に練習に取り組ませる。
「取り組みの実際」バスケットボールに必要な基本動作（（ア）ハンドリング（イ）ドリブル（ウ）パス（エ）シュート）練習（決められた時間でどれだけシュートを決められるか、パスがどれだけの距離届くようになったか等）を毎授業の始めに設定し、上達度を「個人カード」にチェックさせる。
「成果」自分の技能状況を「数値」で知ることができ、向上心を抱かすことができた。

ウ 課題ボードの活用

「ねらい」空間に侵入する、空間を作り出すなどの連携した動き、安定したボール操作を視覚でイメージさせる。また、チームで話し合うことでコミュニケーション能力や言語能力を向上させる。
「取り組みの実際」基本・課題ゲームを行う際にチームの作戦や戦術を考えさせることに使用させる。
「成果」チームの課題解決に向けて生徒同士で協力し、教え合う場面が見られた。

エ VTRの活用

「ねらい」生徒達に最終的に上達してもらいたい理想的なプレーをイメージさせる。
・パスした後サポートしないで止まっている状態を防ぐこと。
・全員が遠慮せずシュートをねらって、ミスを恐れないこと。
「取り組みの実際」バスケットボール部が行った基本・課題ゲームを見せる。
「成果」“安定したボール操作”や“空間を作り出すなどの動き”の良いイメージがもて実践的な場にかすことが出来た。また、基本的なルールや理論も確認できた。

オ 基本ゲーム

「ねらい」“安定したボール操作”と“空間を作り出したりするなどの動き”など特にオフザボールの動きを意識する。また、瞬時に声を出して仲間をチャンスメイクできるようなプレーを意識する。
「取り組みの実際」コート半面×4 1コート5対5に分かれる。
・1チームはボールを5回つなぐ。（ボールを保持したら動けない）
・1チームはボールをつなぎ、持っているボールで相手にタッチする。
「成果」仲間同士いい声かけができず、パスが繋がらなかったり、相手をタッチすることができなかった。生徒達は動きながら、考え、瞬時に声を出すという作業がいかに難しいかを痛感していた。

カ 課題ゲームの実施

「ねらい」全員がシュートチャンスを得られるように、本来のルールより少ない人数で行うことにより空間やボールを持っていない時の動きを意識させる。

「取り組みの実際」

コート半面×4 1コート3対3に分かれる。

コート全面×2 1コート5対5に分かれる。

「成果」個人技能の向上が図られただけでなく、オフザボールの動きが始め、安定したボール操作や空間をつくりだす動きが見られた。

(空間に侵入しシュートを放つ生徒)



[保健体育科としての指導の工夫] (全領域を通して)

ア. 号令走, 福岡県民体操, 補強運動の実施

「ねらい」中学校から入学してきた1年生に現時点でどれくらい体力や精神力があるのかを認識させ、3年間を通して、計画的に鍛えることを視野に入れる。

「取り組みの実際」号令走(体育館, グラウンドでのみ実施), 福岡県民体操
補強運動(腕立て20回, 腹筋20回, 背筋20回)

「成果」授業開始時から大きな声を出したり, 体を動かすことによって, グループの中での帰属意識や一体感を得られた。また, 生徒同士がお互いに長所や短所を補うことによってクラスに協力する良い雰囲気が生まれた。

7 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

ア. 柔道の授業から

グリッドを使った指導は, 狭い柔道場で授業を行う苦肉の策である。素晴らしく良かった点は, コーナーに立つ生徒が審判の役割を果たし, 安全監視をしながら他者に声かけを行い, 真剣に見ている内に柔道の見取り稽古の観点にたっていたことである。

他人の技を身近に感じ, 自分も挑戦しようとしていた点は, 私自身手ごたえを感じた。

イ. バスケットボールの授業から

グループ学習という形態の中で, 「基本・課題ゲーム」を行うことにより, バスケットボールが苦手な生徒も得意な生徒もそれぞれの課題解決に向けて, 一人一人が意欲的に取り組む姿勢が多く見られた。

(2) 今後の課題

ア. 柔道の授業から

授業においては, 柔道未経験者や体力の低下した男子, 更には女子などを交えたクラスが対象となってくるため, 「柔道嫌い」の生徒を出さないようにオリエンテーションや導入の段階での工夫が大切である。また, 技術的部分で早く乱取りなどの実技に移行して時間を多くかける必要がある。そのための, 今回のグリッドの改善を考えた。(ア) 広さの工夫『男子・女子・技』などで変化(イ) 早い段階でのグリッドグループの活用『受け身や6種類の技のグ

ループの同時進行等』(ウ) 技のグループのローテーション (エ) ビデオの活用 (ミラー効果の活用) 等, これまでの授業を改善し, より良い内容を目指し, 工夫していきたい。

イ. バスケットボールの授業から

基本ゲームと課題ゲームの間に生徒に意識させる技能や戦術を話し合わせ, もっと思考・判断の能力を伸ばす工夫が必要であった。コミュニケーションがうまくとれずグループの中でうまく効果が上がっていないグループがあったので, 教員の更なる指導・支援が必要である。